

## 特別寄稿

### カナダ・トロントでの異文化理解教育等の研究会に参加して

真嶋潤子(おおさかこども多文化センター会員、大阪大学教授)

編集部より

編集部では以前より大阪大学の真嶋潤子先生に OKoTaC 通信への執筆をお願いしていたところ、このほど実現しました。真嶋先生は当 NPO 創立以来の会員であり、かつ多くの面で NPO 活動に支援協力をいただいております。

今年のゴールデンウィークに、カナダのトロント大学教育大学院(OISE)とトロント地区教育委員会の共催で行われた「言語的多様性を祝う年次大会 2014 (Celebrating Linguistic Diversity Annual Conference 2014 Toronto)」に参加しました。

その会には海外からも含め数百人の参加者があり、バイリンガル教育や異文化理解教育などに関して、多くの実践報告や研究発表、講演会などが行われました。今回の大会は、カナダのバイリンガル教育の推進にこれまで多大の貢献をしてこられたジム・カミンズ先生が今年定年退職されることを記念する側面がありました。

カミンズ先生と言えば、「生活言語と学習言語(BICS と CALP)」という概念に用語を与えた方です。(その後修正がなされていますが、詳細はカミンズ著 中島和子訳著 2011『言語マイノリティを支える教育』などをご覧ください。)

記念すべきそのような大会に参加することができただけでも光栄でしたが、私は中島先生をコーディネーターとし、リリアン・テルミ・ハタノ先生、小貫大輔先生、古石篤子先生と共にパネラーとして発表する機会を得て、カミンズ先生の理論が日本の年少者教育の研究者や実践者に与えたインパクトについて、「日本のニューカマーの子どもたち」というテーマでお話しさせていただきました。

大会中に多くの実践報告や教材、移民の児童生徒の「アイデンティティ・テキスト」と呼ばれる作品紹介などを見る機会を得ました。特に印象的だったのは、私が参加した分科会の一つで、英語指導の先生に連れてこられた「元難民」の少女が発表してくれたことです。その小学5年生の女の子はイラクの難民で、ESL(第二言語としての英語)クラスで頑張って英語ができるようになっただけでなく、困っている人のお金を子どもたちで集めて寄付をするという活動を行った経験を、しっかりした英語で話してくれました。自分のアイデンティティを確立していく中で、「助けてもらう子ども」から「人助けをする子ども」へと成長し、「将来は人のためになる仕事をしたい」と何事にも意欲的な少女でした。英語で堂々と、先生たちの会議で発表するという経験をしていることから、非常に自信をつけ高い自尊心を持っていることが伺えました。

発表の最後に、会場にも来ていたお母さん手作りのバクラバ(ナッツパイの蜜漬け菓子)を売って、そのお金を困っている人のために使いたいということでしたので、私も喜んで協力しました。

社会的に弱く、何もできない子ども、教室の「お客さん」といった「社会のコスト」と思われがちな難民の子どもが、主体性を持って学び、自分のことができるようになった上に、社会の困っている人を助けるために自分に何ができるかを考えて、情報を集め、周りの人に相談し、協力を得て実行している姿を目の当たりにしました。子どもたちにそのような指導をし、励まし、社会の宝に成長させるという過程を垣間みせてもらい、カナダの将来は明るいという印象を得ました。

